

昨年11月13日、アサギマダラ2000キロの渡りの記事が下野新聞にでていた。日光湯元から八重山諸島の与那国島へ2080キロ飛来したことが確認されたと言うのである。かなしいことに、私は最初疑ってしまった。それほど感動的な発見の記事であった。それが事実であったことで、捏造ではないかと疑った分だけ余計に感動が高まった。昆虫学者の中ではすでに周知のことだったかもしれないが、右脳の傾向のある私にはさらに感動を増幅するものがついてきた。

<p>てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った</p> <p>安西冬衛</p>	 <p>アサギマダラ (上) (下)</p>
---------------------------------------	---

昭和初期のレスプリ・ヌーボウ運動の中で、短詩型文学の頂点の一つともいえるこの詩を私は思い浮かべた。それが実験的なモダニズム詩の見事な結晶とばかり思っていたのだが、実は地理的・生物的背景があり、その上でなお「韃靼海峡」という言葉が詩的想像力の産物であったことがわかり、この詩の感動をさらに深く響かせてくるものになったのである。安西冬衛が蝶の渡りの事実を何かで知っていたのかどうかは解らない。おそらく玄界灘を臨む海のほうへ蝶々が一匹ふらふらとあてもなく飛んでゆくのを目撃したのだらうと思う。その辺に詩の発生の原風景があったのではないかと私は思うのだ。「韃靼海峡」はおそらく対馬海峡あたりのメタファーかもしれないと思うが、架空の韃靼(モンゴル)海峡にしたところに、この詩人とこの詩の、高い芸術性があると思えるのだ。“韃靼”という漢字の音の烈しさと文字の剛さ，“てふてふ”というひらがなの弱弱しさと生命の頼りなさ。この対比と構成が、ダイナミックな空間に緊張感を与え、いのちの勁さと愛おしさを表現したものと思えるのだ。鹿沼詩友会ではこの記事をもとに次のように詩作してみた。

<p style="text-align: right;">蝶の渡り</p> <p style="text-align: right;">日光湯元から八重山まで 2千キロを渡っていった アサギマダラ</p> <p style="text-align: right;">先史からの呼び声に従い 自滅へ急ぐ人間への 警告のように 光の溼 風にのって 確かに渡った</p> <p style="text-align: right;">軽合金のような つよい羽は どこからきたのか アサギマダラよ 飛ぶことを続けよ</p> <p style="text-align: right;">ふるえるいのちの呼び声 次世代への病を癒し 希望の燐粉を 空にまいて</p> <p style="text-align: left;">(伊藤・小林)</p>
---

さらに、カオス理論の話に出てくる「北京で蝶がはばたくとニューヨークで嵐がおきる」ということが混迷の時代の脳裏をかすめて、私には連想されたのである。

2005年の冬はシベリアの大寒気団がものすごかったのだろう。アサギマダラはこれを予見していたかのようだ。毎年越冬のために渡りをする鳥たちにも異変があった。12月30日コハクチョウが13羽、鹿沼にやってきて越冬した。鹿沼では数十年ぶりらしい。黒川・見笹橋上流に堰があり、それが広い池のような水溜まりをなしている。其処を越冬の場所を選んだのだ。3月はじめごろには旅立ったようだが、来年もまた来てくれることを多くの市民が願っている。さて「鹿沼は歴史的に東西文化の交じり合うところだ」と言われている。鹿沼では晩氷期、今から20,000年前ごろからの旧石器文化の稲荷塚遺跡、14,000年前ごろの坂田北遺跡、鹿沼流通業務団地内遺跡などが発掘されている。ここでも東西文化の交錯が指摘されている。地理的にみると、鹿沼は温帯にあって、冷温帯と暖温帯の境目で、年平均気温摂氏13度の線が市域の南東部を横切り、北限と南限の植物が交じり合う地域である。そうすると白鳥の越冬南限も肯けてくるのだ。鹿沼が東西文化のそれぞれからの弱い辺境の地か、それとも東西文化の強く交じり合う地か、それを決めていくのは歴史地理的に鹿沼が新しい文化の発信地になれるかどうか、その将来にかかっているのだと思う。私は「鹿沼の土着的市民性は縄文文化にもっとも深いところで親近感を持っている」と感じている。その土壌と根の上に“なつかしい未来”としての鹿沼の文化が創造されることを願っている。

<p><b>冬の紀元</b> <span style="float: right;">小林 守</span></p> <p>シベリアの寒いベロが垂れ下がってくると 十数羽のハクチョウが鹿沼までやってきた 氷河期が終わってからもう一万数千年は経っている</p> <p>遠い紀元を白い羽ばたきの透明な痛みを感じとる ハクチョウよ この地で初めて私は見た 鹿沼の水はほどよく温んでいるというのか ここは北限のクスノキも根づくところで 交じり合う温みの生える地方だ</p> <p>とりわけ奥深い寒気団が垂れてくるなら その軒先でしばらくはじっと遊べ ハクチョウよ それぞれの方向と赤い舌鋒をだいたまま いそがずに旅立てばいい</p>	
--	---



